



重陽の節句

附属診療所 院長 田中 邦雄

もう秋です。秋の節句といえば9月9日は「重陽の節句」。別名「重九(ちようきゆう)」とも「菊の節句」とも言われています。「重陽の節句」というのは、中国から伝わった五節句のうちの一つです。ちなみに5節句は次の5つ。

- ① 1月7日 人日(七草)の節句:無病息災を願う。
- ② 3月3日 桃の節句:女兒の成長を願う。
- ③ 5月5日 端午の節句:男児の成長を願う。
- ④ 7月7日 七夕の節句:技巧の向上を願う。
- ⑤ 9月9日 重陽の節句:不老長寿を願う。

お気づきのように、いずれも奇数の重なりです。古代中国で、おそらくは数遊びから始まったものですが、日本には暦として渡来して、宮中の農耕祭祀と溶け合っただけで受け継がれてきたものです。国家主義的な祝祭日が明治政府によって制定される以前はこれらが祝祭日でした。一方上流文化では、それぞれの季節を愛でる風雅の行事として取り込むようになってきました。

陰陽道では奇数が陽数(吉数)とされます。その中でも9という数字は陽の極み、その最大の陽数9が重なる、すなわち重陽(ちようよう)は現代の中国でも五節供のうち最も大きな行事です。また9は終わりの逆で無限や再生(よみがえり)をも意味します。不老不死、長寿若返りを祈願するまことに現世利を求める中国的な祭りと言えましょう。

ところが「重陽の節句」は日本では一番地味な、というよりほとんど知られていないと言っている節句になってしまいました。が、戦後の「9月15日/敬老の日」の制定にはこの不老不死、長寿若返りを祈願するという意味合いが生かされ、現在に続いています。

「重陽の節句」は「菊の節句」とも言いますが、そもそもこの時期は菊が咲いていないので祝いようがありません。実は節句は本来は旧暦で祝うものであり、旧暦の9月9日というのは新暦で10月22日(2004年)にあたり、今の暦だと全くの見当外れの節句になっています。これも忘れられる一つの原因かもしれません。

旧暦の9月、新暦の10月の終わりと言えば晩秋です。邪気を払い、寒さに向かうこの時期に、無病息災を願ひ、防寒の意味もこめて、この重陽の節句は行われました。

重陽の節句は「菊花宴」とも言われ、嵯峨天皇の御代には神泉苑に文人を召して詩を作るという形で行われており、淳和天皇の御代の末からは紫宸殿に場を移し、また、仁明天皇の御代以後は、内裏の紫宸殿儀として定着するようになったそうです。

宇多天皇の御代からは、菊の着せ綿(「被綿」とも)という慣習も見られるようになりました。菊の着せ綿というのは、その字のとおり、菊に綿を着せる、つまりかぶせることを指します。9月8日の夜に、菊の花に綿をかぶせておくと、一夜明けた翌9日の朝には、その綿は露を含んでしっとり濡れているというわけですね。当時は、この綿で肌を拭くと、老を棄てることができると言われていました。ちなみに、この綿は「真綿」つまり蚕の繭から採った絹綿のことであり、今なら、さしずめシルクパフというところでしょうか。そう考えますと、確かに美容効果もありそうな気がします。しかも、その絹綿には清々しい菊の香まで移っているわけですから、この着せ綿が贈物にもされていたというのも納得です。

江戸時代初期の『後水尾院當時年中行事』によれば、白菊には黄色の綿を、赤菊には白の綿を、黄菊には赤の綿をそれぞれ着せるという決まりがあったそうです。早朝に菊花にたまった朝露を飲むと長寿に良いと言われ、宮中でこの日天皇が菊酒を臣下に賜ったという古事から、「菊の節句」と言います。俳句で「今日の菊」といったら9日の菊をさします。以後のものを「10日の菊」とか、「のこりの菊」、「残菊」などと呼んであまり好まれません。つまりこの日が菊の盛時ということになります。

菊は桜とならんで日本の名花の雄ですが、もともと日本にあった植物ではありません。菊は大和時代に中国から渡ったとされます。文学史的には、古今集の頃から文字として現れます。江戸時代には庶民の間で多く栽培され、愛でられるようになってきました。大きな菊の宴が催され、寿命を延ばすと信じられていた菊を使って様々な楽しみ方が広まりました。

観賞菊の交配が盛んで、2000種とも言われ、キク科でないものまで入り込んでいます。つまりそれだけ日本人に愛されている花と言えるでしょう。天皇家の紋は花びらが16弁、皇族のは14弁です。和菓子屋が菊を意匠して菓子を作るときはこの数を遠慮して15とかそれ以外の花びらにするのが通例になっています。菊は国花であり別名も多い。菊という名称は元来漢名で、和名ではサギナ(左岐奈)と言っていましたが今では菊で通っています。不老長寿の靈草として、チギリグサ、ヨワイグサ、モモヨグサなども呼ばれています。

重陽の節句にちなんだ秋の酒に「菊花酒」という酒があります。天武天皇14年(685年)9月9日の重陽の節句に菊花の宴が催されたのが初めてで一名菊の節句とも言いますが、この日に賜る酒は菊酒と名づけられ、「一名延命の酒」と言われました。

菊酒は菊花 4~5匁を水5合の中に入れ1時間くらい煎じ出して冷やし、これに酒1升、麴2合砂糖1合ばかりを入れてかき回し、さらに菊花を加え水を少々入れてかきまわしてから瓶に入れ密閉して、3~4日置き、これを濾過してできあがりです。古来より強壯酒と愛飲され、延命酒ともなります。池波正太郎の「鬼平犯科帳」にも妻の久栄が鬼平に飲ませる記載があります。江戸時代にはポピュラーな呑み方だったのでしょ。一度試されてはいかがでしょう。

<http://www.morinomiya.ac.jp>

みなさまの治療院(勤務先)を学園ホームページ《治療院をさがす》にリンクしませんか?



森ノ宮医療学園ホームページでは、校友会のコンテンツもご用意しております。引越・転勤・婚姻等による登録内容の変更や、校友会報バックナンバーのダウンロード、会員の皆様の診療所の検索等がインターネットで簡単にご利用いただけます。

※診療所データベースへの登録をご希望の方は koyukai@morinomiya.ac.jp までご連絡下さい。

- 住所変更等は、登録変更フォームより簡単にできます。
http://www.morinomiya.ac.jp/koyukai/koyukai_top.html
- 校友会報は、インターネットでもご覧になれます。
- 卒業生が経営している治療院をインターネットから検索することができます。掲載をご希望の方は、森ノ宮医療学園校友会事務局まで。